知床岬 2005　その２

岩峰のすきまをロープを頼りに降りていく

　調査をしながら岬付近までたどりついたのは結局２日目の夕方、うす暗くなってからだった。岬の突端付近の調査を行うにはもう時間切れだ。明日はもう岬から船にのって帰らねばならない。明日３日目の最終日、ウトロに帰る船がでるまでの時間をできるだけ調査に充てることにし、この日はキャンプサイトへと急ぐことにした。
　海岸から台地の上にあがり、ゴールの文吉湾を目指してヤマアワなどが目立つ草原のなかを歩く。ハンゴンソウの藪をいくつか抜け、やがて文吉湾を見下ろす台地のへりにたどりつくと、漁港の一番奥、コンクリートの上に２張のテントとタープ、そして陸に揚げられた２艇のカヌーが並んでいるのが小さくみえた。
　最後の晩餐には、さも当然のように大量のカレーができてきて少々たまげたが、皆できれいにたいらげて何ものこらなかった。食後、採集した植物をタープの下でひろげ、ヘッドライトの灯りで標本整理を始めたが、その頃にはもう大分風が強くなっていた。
　タープに叩きつけるようにして吹く風がいつもよりぬるいのが台風らしさを醸し出していたが、羅臼出身のサポートの人達２名は「やはり俺らには斜里はちょっとぬくすぎるもんな」とのんびり頷きあっている。羅臼と斜里の気候がいくら違うゆうてもこんなにはちがわんやろ、と心の中でツッコミをいれつつ、がさがさ新聞紙をいわせながらはさんだ標本を押したりのばしたりの作業を急ぐ。

発行　斜里町立知床博物館協力会
099-4113北海道斜里郡斜里町本町49
斜里町立知床博物館内
TEL:01522-3-1256　FAX:01522-3-1257
http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/

　風がどんどん強まる中を横になったが、どんどん風雨が本格的になってくる。夜半、テントに入らずにタープの下で寝ていた私をふくむ３人がテントに逃げ込んだ。未明、２張りあったテントの片方はフライが飛ばされて中が洪水となり、もう１張りも盛大に床上浸水した。
　結局のところ皆ずぶぬれで目を覚まし、早々にキャンプの撤収作業をおこなう。せっかくなので調査も行いたかったが、台風の影響で帰りにのせてもらう船の予定がはやまり、朝のうちにウトロへ帰ることになってしまった。
　出港までは番屋の土間に避難させてもらった。暖かい汁物などの振る舞いをありがたく頂きながら雨の音をきく。夏でも知床の冷えた朝は吐く息が白い。着替えのある人は濡れた服を替え（私は着替えは持たない主義だ）、バカ話をしながら船を待つ。野外調査をするとき、もっとも大切なのは待つ能力だ。
　ウトロに帰り、漁港から荷物をおろして人心地がつくと、リュックから下着にいたるすべてがずぶぬれなのが気になりだした。今回の調査隊の人員はなぜか浸水対策が不十分な人が多く、食糧計画をたててくれた人に食費をだすのに取り出した千円札は全てぺたぺたの濡れ紙であった。なんとも失礼な話である。ちなみに私は同行者の所持していた図鑑を道中で借り、リュックの蓋にいれてそのまま失念していた。これは乾かすとページが開かなくなってしまい，なんとも申し訳なかった。
　調査そのものは全体を通してやや押し気味、時間が不足したなかでのものだったが、これまで記録にはあっても自分の目ではまだ確認できていなかった植物も多くみることができた。時間をかけるべき場所、そうでもない場所、必要な装備もだいたいは見当がついてきた。これで来年からは効率よく植物相調査ができるかもしれない。そんな期待を持たせてくれるには十分の内容だった。
　最後になったが、調査で一緒に歩いてくれた人々に感謝を。ずっとカヌーの上だった人々には羨みを。

（内田暁友）

番屋の土間で出港を待つ